夫木和歌抄

巻十三

へ刹4
1.765
13

130

1765
13

568

文永和歌書等十三

秋部四

月　駒迎　霧

秋風　野　秋面

霧　秋夕　秋萩

秋雜

569

月　三行分上下

彩ふ和

人不和

法性寺入道関白

大江為言

秋部中

久安百首

元永二年内大臣歌合月判

伊豆国熊坂村 菅生蔵書

みなされやあまのかるもにしほたれてかほるともなき八月のやまのは

菅原孝附

判云左のうたよろしくきこえ右はされ八月のこゝろもありなむと

よろしめでたしのるそて八月とこそしるしつつかる

よろしからん

新秋月哥十二首中　中納言家持

あき風の吹くさけしれともしらなみのたちかへりける

頌月哥中　よみ人しらず

あきのよのくもゐにかよふひかりこそなかしかれ

哥集　人丸

万十二 夕つくよあかつきやみのほのかにみし人ゆゑにこひわたるかも

万十一 ゆふづくよ曉やみのあさかげにわか身はなりぬ汝をおもひかね

家集秋月　西行上人

秋ならでとはぬ月もこそまれてひかりをそへむ三日月

新六一 あさましく人のまねのみふるさとへ残りそめしあかつきの月

正三位知家々

千五百番歌合　藤大納言忠良

ゆふつくよあかつきかたはひさしく雲ゐにかゝる有明の月

新六一 家集　信実朝臣

更されていさよひそめしかけなくてそのうちの月

光俊卿

雲のうへひさしき清の杜間よいさうひのうつ山のその月

ゆふづくよ　　実

伝宗弱代

第六一

雲のうへすきぬるとこそ見てとこそ思ふ所なり

千首歌　寂蓮

宗尊親王

雲さえてすむ人さ月をみのうたのひかり成ぬてをくん

遠久七年月次歌　合未出月

前中納言定家卿

杜の宮月のとをとこそうつるひかりさやかに見ぬ

為家卿

同　　禄

為家卿

そめなりまさるとそれもやとめ白雲こそ山の月

為元年百首月　　兼好法師

とれはうつる月のさとるかをうつれてひかりそ宿とまさる

よひのまよひひかりをみて似るあるんかきまてもて月影

定月歌合　　徑

めるとをすそ野とに原代ふきしまの下陰

月前中　　同

月なる杜のかをとうつ和さ人をうめちうつ和つん

光俊卿

第六一

見てさ代下はてとけとさすのをもきて月とはるまて

為家卿

花月百首和歌　　三条家歌

かぞへられぬ秋さて後の月のうちにあかしてもあらぬ神乃

治承二年右大臣家百首和歌合

順徳院御製

秋来ぬと思ふ心人に見なれて里さとおとされぬ秋の三月

左京大夫教長

月清上

秋風にこの月月いとうとそそひらとむすぶ神の白玉

宮内卿

ひとくるるや夕暮れにたれの家ぬ袖にぬれて出る月の影

後鳥羽院御製

あまの海やそのうらうらに清てそすむらん月とともに

家集月前松　　土御門院小宰相

うゑし山月いとのまふいつくそそて松の葉ふるる風の川なみ

彰子入内歌合　　中納言家持卿

ふるりのなつこの三月山ゆいてくる月とさくらの月の新め

建永二年百首山月　　為家卿

おのもち松陰ふるむかゆくえの山ゆくの山の月

暦應三年頃百首山月　　行家

山のそらのかれ雪ともとまる新くすゆの春

題しらず　賀茂氏女

万四
おほかたのよにはいそしおもひいたしてまつ月夜よしとあかす

寄月恋　権上宮女

万六
山のはにさしもえぬ月とこそ天の原とわたるひかりをみてしかと

詠月照山明　千里

ぬるをうてみえぬ秋月の山のはよりてるまてもりつゝかな　定家

月光有浮雲入　同

てる月のかけをはあかしとおもへともなをそゆかしきすかたを　〓〓

月照何山一玉珠　同

てる月は波のそこまて照されて玉とそ見ゆるよしのゝ川

続千秋下
九月十三夜月下釈教　大納言経信

ひさかたのそらにかゝまる秋の月みちの雲を鏡とそみる

百首歌合古来風体　権大納言忠家

秋の色にかくれぬれは秋の月この夜さもとめてあかなく

建保四年百首　家長朝臣

露ふかき袖にもそなれるひさかたの月影さへいかなくらし

見て月をみて　俊頼源信

続拾遺釈教
ふたつもしいかなるそらの月なれはへのものにかくゆくらん

月歌十首そのなかに　権大納言家

ありてもなくなるそ明ると月影を秋のこゝろにまかせことなりま

574

三十六人歌合

玉葉雜五

題しらず　後徳大寺左大臣

ふるさとの月よりのこころをしらせやる

久安百首　実清朝臣

くれの秋月いかに秋の山なきるれいんとくそくれうんさん

あまのそとをけさとふるとくれ月ゆかさるひいきのなこなりうら

花月百首御歌　後京極摂政

憂きといふたとさくそいとんくそんのうけと月よりもうめる

さくくよむしきてきうたまうくそくかけ方よりうる月は

きくなのきたにあうれとのうくそうる月とけてとけうれ

四年未月四日歌　同

かさくりうんつくよりをあきまれ月をしてやおうる秋の海そ

四年未月四日歌　同

あの雲をきの光よりくそうる月の雲れ村きそ

家撰歌合山月　同

あ一内の山のうくよいくくこの月はのみやこのうくなうる

八月十五夜月前松風　同

秋の夜の月ひかりをうけて月の葉よ松風そく

建長八年百首歌　藤原為氏大臣

みまいまつ源さうを建秋の夜に祝こそやけ世山のうの月

正治六年二百首歌　後京極摂政

続後秋下

かくさかりやゆきてうら海をうきて月のゆくへ秋風そふく

寛治二年百首　　堀川院

みるてうとなくよゆふの秋のれい月よりうきうるとちはさく陰

右家綱

をさうらみさいを見ともあるてうや月の光の秋のうるをき

右民綱

さ波やかよりうるを秋の夜の月のゆくてうもうれしい

四条

秋ふかくなりにけるかなひとりそねてゆうさやうるの山

建久七年秋六百首　置　二字三十二首

和中納言家綱

つりあのうるを波なみよりの月のゆくてうをいとはしいとをうそ

月　百首

ゆくてうの月のあるていをうれひとりもてやうくをうれ

いさうをうたつのうりて同とんあうのこそ月のつる参

秋十中二字百首　　月

たちのうをうき月の光をうてさうをうんのそてとうそや

式部中月の中　　月

いく里うをうをうんうをうをうの月をうあうて

里をなうをうを光をうをうをうをうをうの月

花月一首出題

なか
中くらゐの月のくまなきすがたのよハあるうらゝかゝりあの空

清素中

法九条関白家

山のゝいあらのうゝ氏ゆるるれや月のゆゑあもこきうれて

建長八年百首合　前大納言為氏卿

くま
雲の波あゝなくきうゝの月のあかつゝけゆくこゝろ

仁安三年姫宮一品合月判　右衛門督

幸
ゆつゝおの月の永濤あゝたれ秋おゝの海ゝいとゝん

藤原俊成卿の八月十五夜ゆゝ秋ゆゝ蓮花あゝ

ちゝもすゝゝ紅葉をゝゝゝ

三条右大臣家歌合　右衛門督

久
久ゝの月ゝ新ゝゝれゝゝ

八月十五夜

かけ
なゝ

塩

ゝゝゝゝ

池

蔵

ゝゝゝゝ

月の

ゝゝゝゝ

いつ日

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

新六一

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

新六二

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

月

色かはらしかあつきのかれとひとつまする月のけしき

信実朝臣

貞永元年八月十五夜名所哥合

家長朝臣

男山秋のなかはの庭月ハこの夜のひかりぬるをみえ

親宗中納言家哥合

法印行清

男山秋のなかはのあはれみ雲をなをきるともそつ月ハさやけき

[illegible]門大臣

名たかき秋のなかはの一夜をはしらてやすむる月けり

文永二年歌合

前大納言為家卿

よのまさにこよひ秋のなかはの月をやとんそのけれ

夫木集百首

従二位家隆

とかくしも秋の中に今日はみとそこらひや月とめぐらん

家集秋中

建礼門院右京大夫

名かさけみるまの月て秋はつるみえけり月の色かな

五行秋中

定家卿

拾遺員外上中

秋の夜の久しかつきぬもち月のかけそめなかのもなつきなり

家集月蝕を詠しそ歌ある中に

西行上人

山家下

いかにとよいて新にあかすね今夜しも忘れて月みるかな

[illegible]

千五百番歌合　前陽明門院新常

なかめゆく心は月にさそはれて[illegible]はてのやま

（兼）[illegible]の月

　　　　　　　　　　権大納言俊宣

しら雲を吉野の奥の秋の月[illegible]またみる[illegible]つき

（続後拾　秋下）

[illegible]のを[illegible]ぬ[illegible]みちしらぬ[illegible]あけの月

深山暁月

　　　　　　　　　　大[illegible]家

月平[illegible]合

[illegible]ころ[illegible]のこ[illegible]月[illegible]みやまの山

　　　　　　　　　　[illegible]

花月百首

　　　　　　　　　　[illegible]

月影は秋[illegible]のおきて[illegible]山のはの[illegible]あり

光[illegible]院入道二品親王家五十首　経月

[illegible]ねほ[illegible]の[illegible]月[illegible]ころもひと[illegible]

[illegible]月[illegible]さへ[illegible]り[illegible]（十六夜日記）

　　　　　　　　　　安嘉門院四条

（十六夜日記）

[illegible]のみち[illegible]いで[illegible]あり[illegible]

後[illegible]院入道二品親王家五十首

　　　　　　　　　　前大納言隆房

[illegible]せ[illegible]月[illegible]

　　　　　　　　　　殷富門院大輔

百首歌

548

はれくもる月に浮雲のさそふ程に夜半にふけゆく

花月百首　　良経卿

よの人のひかりは月のかけさへやさとさへ行秋の空

文治六年女御入内屏風　正三位

池水に雲井の影をうつしてもくもらぬ物は月のかけかな

嘉元三年楚忽百首　為実

わけ入りてひかり住町の月出てむすふ山ゐのおもかけ

山家月あらまし　花山院内家

秋ことの月のうらに数へて今まてすむ秋のよの月

家集　大宰大弐重家卿

老山の下草に露てねやとそふかにも秋のよの月

題不知　人丸

六五
天のはら空さへさえやわたるらむ秋かせふきて月そさやけき
ことひもしらす

万十一
家にして月は照しておやの引たる枕はおもはそ

新古六一
今こそ月をみるらん人もまさしておもふらむいそ山まのいれ　新古内大臣

新古一
ありあけの月のみてしかもあまのつりせし海山にけて吹くしむるか　後京極摂政

海上月寄花物　登蓮法師

十

580

月影のいたらぬさとはなけれども
ながめてよしのあきの夜の月
保延元年家成卿家歌合　為忠卿
家集月十四夜
二条入道
月影
玉秋下
月のあらぬかたのそらにはつけれども
ぬれてすむ月にかはらぬ
千五百番歌合　藤原知家
はなのかほるかぜにのこるあきの月
ふるさとの秋をしのぶ
二百番歌合廣沢池月　後京極摂政
くもはらふ
なかめこしそらにひろさは
月影

西洞二年百首　藤原為家卿
まくらなれぬるのちのうきねの月のあけがたの
月十中
秋はつる浦ハのなみのよるかたの月をいつくにか
家集
後嵯峨
ありあけてすこしのこりしあの月
仙集
後鳥羽院御製
明
あけぬとはいとはしけれどあの月のこりすくなの
明丸數
鶴岡
西園寺入道太政大臣
ながめてもいつくにかこの月

581

照
すむ月のかつらの枝をおりてやすらひもとむるこのうらかぜ　源師光

家集

とこしへにかすみわたれる月をしるしるべにはるる春の山　後二位家隆卿

小野社百首　建仁元年

白波の波のなみのうへにうつりそめる月をとどめぬ春の山かぜ　後鳥羽院

建永三年和歌所合海月

月やどる海人の袖にうつりかはる波のうへにはかなき　藤原知家

百首歌

月のかげ袖にうつりてとどまるは波のうへにぞ有ける　俊成卿

文治六年五社百首

あまをとめ玉ぞ拾ふてしらなみの月　伊勢

家集

伊勢集

かはかぜにあさりすなどりの海はれいかにかかなる月の影かな

十帝集

あまをとめ玉ぞ拾ふてしらなみの月のかたみにうつりまさるべく　後鳥羽院

建保三年百首

新勅撰神祇

榊葉にうつりもてゆくかすがのやまの月もうつるか　西三位家衡卿

かつらかはの波のなみ里のあまをとめ月よみ出てあかせ

百首歌中

ながめやる波の上の里よりこぎ渡りていとく秋よりすむ月

建長四年百首中の後月

民部卿為家

山家集上

ゐなとりの若葉の山のあらしにもうつろひかねぬ秋の月

西行上人

玉葉秋下

月をのみ待ちぬる浦の秋の夜に氷をしくの波の面かな

西行法師

山家集下

ひとりとはたれかは月をながめまし雲のかなたの秋の夜の月

円上

みやこ人なみだの月をいかばかりかなしかるらんあはれ

浮

ながめやる月すむ波をかぞへつつ人のこころをなぐさめにせん

頭仲行

あはれ秋中納言家

雨をそそぐ月の光に清たれたる月をとすまをそ

円

月前中

ふく

月のあらしにたぐへてひとり見あはれ秋の月

元

貞永元年八月三条内大臣家歌合

藤原頼昭

きみ

ながめそとつ風にうれしき月のかげ

ころ

寛永三年九月影浦中納言家歌合

583

そら
空はれて雲のなごりにおきつ風月の桂の影のさやけさ
かつら
藤原為真

光
さ夜月をとて
良全法師

続古雑下
かゝみれは年をへて老をかゝみの影そふる月の
ひかりに

法性寺入道前関白家歌合
源仲綱朝臣

くもりなき鏡よもすからてらしつゝ老のひかりのそふ月のかけ
かゝみ
老

嘉応二年住吉社歌合社頭月
頭
盛方朝臣

よし
住吉の松の梢をこゆるせへにしもひさしき月のかけかな
こすゑ
せ
賀茂政平

すまのうら藻しほたれつゝ松のこまより月のかけかな
久安五年七月山路歌合
澄憲法師

いかにせむ今宵の月にあかすしてはるかにわたるなみのうへかな
今
つき
は
三字下
判云 俊頼朝臣云 右歌本よりおなしもの
かくもまた

嘉応元年八月会 法印 判者 合月
法眼全書

いにしへの月をとひてはいまもなを
二三字
判云 俊頼朝臣云 文集の句や凡風池上
三
月送秋過高山 よりくすれはひとつにはあらす
過
鳳凰

589

稲ごとかきはらひてきまめあつけるの
月とくすてあることそうちうくもくぶひて
山のくもの月すでいつ風ゆりうれもえく
義方二年十重東京詠月 源通親卿
ひかり
ながとしの夜ちりの乳とみはうとしけるくもすまし
山寺判官後朝々云こうひの月と実するうちつ
れすでくもゆりそ白玉乳とえんがとつひそれは
つるの乳に光あるまりとうつりうげと光と肉
をこうわよれれうあとそうと云く
永久四年八月雲有合月

雲のかりありてふこうひきてこれは月とそ隠れ
山寺判官後云雲のかりふりてるどつるは
山のくもあらでるのうとそ玉と住山と
みてふりくいつひゆるゆるは月とそうれら
りとうるは貫之がたこの浦とは今日云寺
にれるすでうるうて物うる寺合の寺よはかれ
ちはうもひがたのかちとうて物とうく
保延元年八月歌合月
拾中納言俊忠卿 具

時雨ふりも出夜の気のあきれ月のうつらぬ花さかりも
此寺判者神祇伯那仲王云右の寺は今夜
の気いづ待ん哥と云て末はあるべからず候
先おしなべ哥をいさゝか難とぞ云て待る月の
かげのむさうかわしら雨れ寺は八月
のうつゝとばかりは紅葉とこそ云て侍るれ右
は[illegible]月のうつるも
花やさかりんとまるは春のむかへさくべきやと
ま[illegible]秋月の侍る[illegible]花光とつく
見られば ひかしこはあまりことも やどなど

家集月字中　為親朝臣
秋風よ秋やふけぬらん大空の月のうつゝかすみゆくかな

家集　定家卿
さてもあはれいやましに大方は月のうつろふ花とみしらて

大橋も家々まで月を　源仲正
ますらをのちかるのけもあられて[illegible]ちる萩の上の月

常縁集百首　閨中月　同
ちしらぬあさまに寝やとこふらひて寝月とはきこえぬ

安元元年閏九月哥合寒夜秋月
従三位頼政卿

586

二番

判者枕のそはいうぐとそまりけふとこそ

遠長八年百首の合　従二位家隆

月の夜は雲をはらそめてこころあけやまろうるあふ

遠久二年百首中　宮内卿

ふるさとのこの夕べ雲はれて月さやかなる秋の夜

第久元年日吉社の合　同

はるかなる雲をはらすとそこの中うる秋のよの月

あらしかくらんはかくらん山の月をとまるとすれば

住吉社歌合　河合月明久冷

義孝朝臣

秋の夜のとまりを月はゆくれども月よみるとてたれとてしき山の月

和二年百首合　海辺月　法勝寺御製

新千秋下

ふるさとの山人いまはそなれぬるはつかの月

家集月二十中　西行歌

おもかげひとりさしかたきの残とまる秋のよ月

四条三年月裏中　院　第六月云百首

雲ほそき横雲の秋はうるふきて夢ようるうる春の月

百首二十　順徳院御製

ふる山さとの色はうすく霧ふかし秋のよの月

587

こゝろあてに見すてゝ帰る月の露の
家々のきひやく人へうつるらん
文永七年無題百首中　西園寺
やとりにひとりあくるそ秋の月ひとり残りてそうつる
千五百番合　寂蓮　家集法師
あらしふく峯の月ふけて独ぬれて残りてそうつる
聖武天皇
ふけぬるかこゝろ澄の月新しくうつる秋の山のそ
西行法師
あらし吹くこの世ひとつ過て波こさはやうつる月のうけ
山家
ゆくすえの月こゝろのすゝしさ秋ふかくやとの雲のいり
寛治七年二月六合海辺月　信実朝臣
つきこゝろしるこのあまのこゝろ人世塩の月をとゝ出てん
門裏四条山中秋月　西園寺
かこ山の峯の月さゝ下葉にて月のうけつる秋のゆ
遠仁元年十首合　山家秋月　藤原為家
新さゝる月ゆ神の海そうれはゆる秋の山のて
遠仁元年十二月六合　山家秋月

山のこなたの梢に住みて空ながめありあけの月　　寂蓮法師

西治二年百首　　第六判　左方負

杉ちらす峯のまつかぜあらしれぬ空のうちなる山の月かな　　大納言経通卿

同院御歌合百首　　大納言経通卿

峯の松ちらす嵐の音おとるあさぼらけ新しきまつの山の月　　法印定家

やまとことの山里の春や月はるひらん新しきまつの庭の月かな

撰歌合初判

竹のこいはるる雪ふるあさぼらけ新作て雪ふるさとの月　　前大僧正慈鎮

おとつれ　　まと

秋歌中

老

ちらくのとたにうけぬとめぬ秋ふるさとの月をたれかとはん　　法橋顕昭

くこころあり　　隆

清輔朝臣

か

年すぎて老いぬるかとうらみてたれかとはんとの月の新しきかな　　藤原清輔朝臣

文永七年秋十首歌合　　左九条内大臣

なみた

あはれなる涙のかずにいかなる秋のこの月

おい　　せ

老の波のかずにいかなる秋のこの月

宮内卿入道摂政百首歌　　宮内卿

秋の月ながめてもとしをへぬるかなちぢにかはりてあはれなるさ

遠忌のあさ毎日三中　　為家卿

いま

文永七年毎月一首中　同

家集紙中月　同

同年中　同

拾遺愚草一下

同上

文永十一年毎月一首中月次

建久八年百首　定家卿

同年毎月一首中　同

文治六年百首　俊成

月きよみ千里の外に雲つきて都の方に衣うつなり

式子内親王家十五夜八首　前参議雅経

雲はらすていつくに行らん秋の夜の月のかつらも色の白雪

家集　従二位家隆

長月の十日あまりの夜のあけの川波こほるつきかけの月

続後拾遺神祇　清輔朝臣

山のはの月すむ峯の月やおほ空をひとつにめくらん

家集
久かたの月にあかてやすゝしきおなし秋の名の夜をまたゝのむ

九条集　後京極摂政
さかき葉の色に出るのかけ見ゆる月さえてけしの秋かな

590

新六　兵衛督
秋の夜の月をうつしてあかぬかな池のこゝろにすめる月影

月前遊人
軒ちかきかけの月のはなやかにてやまのはのかけよりくる

正応二年内裏月十首　中納言為相
見つゝまた池のかけそらもさて星やうつれる秋の夜の月

前中納言為兼
山の井の里のかけてむかつて月よりかさねてめくる夜のかな

元久元年五辻殿の亭月
定家

[illegible]

文治五年[illegible]百首

月

[illegible]

九月十三夜内裏[illegible]合　月

[illegible]

遠保三年[illegible]百首　従三位行経卿

[illegible]

家[illegible]　深窓

[illegible]

遠保三年[illegible]百首　後成卿　女

[illegible]

寛治二年百首　従二位行家卿

[illegible]

承安二年五社百首　後鳥羽

[illegible]

新後院[illegible]歌五十首

[illegible]

秋の[illegible]月[illegible]

千五百五十六合　後成々

[illegible]

五百五十六の合　正三位源家々

今とはさくらやかくらん月やゆきあらぬ色にとなるくるか

山千判官藤原載弘

弘安元年百首　従九位源門方

むくなら張こなりしくもの[illegible]ゆきくらのうら月をすむ

[illegible]院入道二品親王家百首

法橋成昭

おもひやらんのこころやくらんゆうてゆき月をうらみる

四十五百首月　従二位藤原為氏

海のそこにやのうきくもとはのうらの八月のつきのひかりあらそふ

弘安五年十七月名所歌合　権大僧都尹嗣

池のうへのさとの月をうつしてあるこのうるおかな

永仁三年五月太神宮社頭合月　元僧法師

うつしもとめひろうしんの社の秋の月はあやまるくこと絵つかな

歌集　西行法師

月をとろ[illegible]

建長八年百首歌合

浪とほくなかるゝたしまみへもあらしふくよはにすめる月かな

千五百番歌合　　三宮

苫のやの秋のかりねの[illegible]八月[illegible]旅の枕

後京極摂政

秋されはそれとも[illegible]紅の[illegible]もやまして月はとかりけり

凡秋中
秋ふかき萩の葉すくる風のおとよ夜ふかく出る山のはの月

後久我太政大臣

弘安元年百首

秋くさの花のとかけの[illegible]ことにあれて[illegible]月とそかなしき

後九条内大臣

秋風の露ふきさそふ庭さえに村雨過て月そのこれる

[illegible]内大臣

文安百首

秋されは木の葉の雨はふらねとも[illegible]月の初霜

定家卿

九月十三夜内裏五首山海月　同

なかめやるあとの[illegible]あけぬ雲の色それとはかりそ山の月

後京極摂政家五首歌合秋夕　同

そめあかぬ月の桂のすゑ葉まてうつろふころの秋の風

花月百首

慈鎮和尚

木のもとは月のひかりやはらはてそ[illegible]まつの秋風

家集　家隆卿

峯たかき松のあらしにすみなりていさよふやまのはの月

俊成卿女

紅葉ちるおほゐの川にふなてしてかつみるまゝに月をこそみれ

建保六年九月十三夜大井にまかりて清滝川のほとりにて

さそひつゝ月をともにてあそふなるこよひの空のくまなきをみる

久安百首　上西門院兵衛

長月の月の光のさやけさを八千代の秋のためしにはせん

594

同集九月十三夜　花山院右大臣

秋の夜の月の光のさやけさは空にかゝれる鏡なるらん

駒迎

堀川院御時百首駒迎　権中納言師時

あふさかはあふ坂山のひとしれすむかふる駒をきくそ

修理大夫顕季卿

ひきわたすみなかみしらぬ空晴て雲にあかしの駒

隆源法師

関の戸をあけぬるきりの中わけて雲ゐの駒をひくそかなしき

文治六年五社百首　俊成卿

595

三六九
三八四

ゆふきり
久夢のうちに弱をしりかくやうにすえ関の杖主

久寿元年七社百首　内家婦

あふ　おも　もちつき
あふさかをこえてもとりしるたかの月の

くれ
夕はれのくもの

家集

俊頼朝臣

ひき　すく　つき
くもりの棚にてのとりにすくりの月の

樋
くもの

あふさか　つき　くも　を
逢坂のくもりやすくとくもりの月と人の月のうてそ弱をしるる

久安百首弱題のうち　前大納言藤原忠通

つき　こく　はら
てる月いつとれる雲のくもりてゆくりあるの弱

弱賢門院御川

あふさか　すき　こま
逢坂の関の板村くもりてをとのゆくのけ

永久二年三月十六日弱

観意法師

たなひく
棚引きくもりの月の弱のつかすあてをとのうち

還琴法師

かけ　みつ　こま
あふさかの板のもりけふ新をとにもあるとのあるとの月の弱

文治六年七社百首　民部卿　為家イ

文
文をえて

はら
ちるのはらやく所とつさそきあるとのひかりこの弱

家意法師

一百首歌弱題

やま　わけ　いり　つき
あふ坂のやまのをかをとの入月をとの弱

あ[illegible]の[illegible]ぬん四[illegible]月の頃　為盛

弘安三年新造堂立合百首

あふさか　逢坂よりひきわけ川をたづねて便イ　安嘉門院四条

同二年　同

[illegible]月[illegible]毎に[illegible]ひき[illegible]の頃　五[illegible]門院[illegible]

百首歌

[illegible]月の[illegible]ひかり[illegible]ひきわけの頃　為家卿

[illegible]

[illegible]ふ[illegible]きそのけ[illegible]

八月十五夜の[illegible]

ひきとる[illegible]

三十首の中

あふさか　逢坂や[illegible]月の[illegible]頃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雲井にえやる[illegible]の頃　俊光卿百

みまさかの[illegible]

家長卿百

[illegible]月の頃[illegible]

[illegible]

伝宗尊百

[illegible]

[illegible]

[illegible]

597

みちのくのあつまやまよりはるかにみるこまのあしたの雲とをつきぬと

中納言行平

ひくしの峯をさそうにしきかはやまかはのもみぢの酒

三行人カナ

霧

三行人カナ

たつたかはかはかぜさむしみよしのの山のあきかぜ海をこすらし

人丸

ちはやぶるかみよもきかじ白浪をくくりあてたるすがたなりけり

万九

ちはやぶるかみよもきかじ白浪をくくりあてたるすがたなりけり

百首四十

[illegible]

[illegible]

[illegible]

武者所光

千五百義の合　　春秋雅経卿

遠仁三年　　定家卿

武勝寺

四天王院名所百首

播川院の河　　仲実卿

建二年百首　　寂蓮法師

寛治二年百首　　前中納言家隆卿

乃東百首　　家長卿

建保三年五百首　藤原雅経

すまのあまのしほやく浦の初霜のうつりもてゆくさとの夕きり

俊成卿女

ゆふきりの夕ぎりのこるこしの海のくまのあるかたの白雲

正三位為家

しらなみのうきまくさ枕ゆめ覚て夜そうらの秋の初雁

藤原光

秋千中

なきわたる雁の夕波のうきまくらのそてもる

五位尉

春

なにはがた浦かすみたる初霞せてうらもなくそてのうらかな

俊成卿女

千五百番歌合

二条院讃岐

嫁ちかきあまのつゝみの夕ぎりのゆくへもとはぬ浦風

建永元年千人合歌　藤原家隆

そらにのぼるかりの夕ぎりのまよひつゝ秋の初雁

建暦八年毎月百首中　藤原

八海のみなとの雁そそらんやひかりのうちの月の夕ぎり

同八年百首歌合　光俊朝臣

初日さす方のしら雲ゆきそらんゆきて山つくしよりゆく初雁

雪三首中

かすみたつ山のゝ[かた]ちもしらくもの[すく]まる秋のあさぎり

まゝのあめ[あめ]のゝ[きり]ぬ[こらし]ぬれて行く

久安百首哥

第六夏十首中

はつ[ち]くの[ひ]ぬ[ま]ぬ[ま]ぬ[ま

二行ニスルヿ

六一百二

中勢のうた

拾遺負外上

三字

三行ニ合ルヿ

柿本新作百首ハ寄　藤倉中勢のうた

夕されはみちの草葉（苔）

負恋三十百首　西園寺

ふるさとの草の葉（くさ）

新千百首　入道前太政大臣

ゆふされはなのまくらに秋の風

影そへて年毎にそ中西園寺

ほしあまのしるしの秋の袖

水無瀬殿十首会　定家卿

あさちふのおのの露（つゆ）

建

建久元年百貫枯木 円

木の葉かく門のくゝうひさきて柳ようるひつしのこえ

武蔵中

つゆ

ぬきつくしこちの露ゝさ枯門はかせ

久米百貫国家の枯木 円

かけ　かな

ころ　ちろ　あふき　ほ

ゝ寄ゝとひなゝすゝの風きて枯の扇そとはさうろく

ころ

十郎百貫四条 円

はな

枯の葉ゝ花ゝ萩ゝうそゝく門の音たゝあるそゝひとさゝ

萩

西河原土百貫四条 円

まくら　そて　つゆ

枯門のしゝさゝくゝさ枕のゝゝる袖て露ゝさ

寂

寂蓮法師

ひと　ころせ　こか

明ゝき山の月みの月もこゝろせるゝ人のゝひ枯ゝろ

建長三年九月十百首 合山家枯門

いま　かせ　さと

今ゝりの虫の音さゝゝゝ山門の音の里ゝ東さゝしるゝん

寛治二年百首

源俊平納言

とた　みつ　あきかせ

家ゝ枯門

の　た　あらし　物

ゝ家の居ゝさゝゝゝゝゝの風ゝ

俊頼朝臣

鎮

百首四条

蓮花寺

萩

[illegible]

四葉

[illegible]

三百六十首中

拾遺秋

[illegible]

百首中

玉葉雜一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

久安百首

[illegible]

百首四季中

[illegible]

遠保四年内裏十首和歌

[illegible]

[illegible]

寛治二年百首秋夕

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

萩

萩の葉にうつろひそめしかれぬれば

二百首歌

河風のうつろの森の秋風を

吹通院

ちぢにそそぐもうつる松の白露

ぬれぬれ

新三六

ひさかたの雲の高嶺の秋風に

寛平御時后宮歌合

うつろひにけり

萱草

秋の野はこころ染めてそめつるは

きぬ萱草

ゆふへ

百十

夕霧の立ちのぼりたる山の秋風

家集秋風

中務

萩

秋の葉はいろいろ染めもあるものを

あらしの

こころ

秋風

ふきぬとばかりこそ

六一

うちなびくすすきの穂にあらしわたりて

六一

秋風の吹くにつれてなびくすすき

こひ同

六一

秋風にいとどなびくすすきの

家持集

三行分上ル

三行分

西行法師

秋ふかみ

佐京極摂政

秋の夜の月の光の

落

あき

月

秋の山さと

月

新後拾秋上

秋ふかみ

はつ

のわきに

月

[illegible]

玉葉秋上　萩

萩のはをうちしなべたる風の音の[illegible]

家隆卿

新後拾秋上　庵

[illegible]

家隆卿

[illegible]

[illegible]

建保二年十月廿五日合　家歌

はなそめ

[illegible]

あき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

萩

ありそうす小萩うりとの屋敷をとこそひの萩のうへ　かなきく所

宣旨歌

ゆくへ　ぬ

ゆくへ　おも

ゆくへもしらぬ秋のおもひて世うれはりしらぬ雨ふるしらくもの

慈鎮

日ことに秋のすしさつてうり所なまくしの雨のあめ　くれ

法橋尋昭

しかい

中納言のしかくまを女をかうるまくに民の神さへうりうりひさうり

仲教

秋部中

新拾雑上

やま　しは　ところ　あめ

秋山の信濃の業秋をよそうすしくれる

後鳥羽院

秋部中

日をよりうり秋の材数を　おと　すきてあくれすとをきうり　いろ　ところ

白三位知家卿

新六一

ゆふ　うき

ゆふれの風うきまうきぬ涙雲よゆきてはうり秋のむし　さめ

白居易三十一百首

後鳥羽院

ちうぬうり木の葉うきうふ　か　さわかなは　つ

千五百番歌合　後二位保季卿

さ　あきあせ　そて　き

小野ふけてうきうふ山の秋風あきあせ材数る神そてきうれて

二百首歌

水無瀬院

むうきうの屋敷をきうり河あうりうの屋敷の秋の夕風　あき　ゆふかせ

毎日一首中

為家卿

秋の夜月明てくれ初る村雲の絶間そなかむ
秋門のさゝをひてゐるかもしゝ面を洗よるてひゝてなく

文永九年毎日一首中　同

秋門しゝ面をうゝ面をうゝ面をう

人丸

[illegible]

百首四十首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今はとて思きはつる秋のよはひのそこと家はせり
[illegible]る虫のいとくれまよのすゝむ家やさめうら

[illegible]百首　　為大納言[illegible]

霧さめる中野の志の[illegible]ら秋て月ゆきうしろあさちの
[illegible]

四条前中納言

[illegible]ゆ[illegible]の[illegible]

中務卿[illegible]

三[illegible]社[illegible]月前[illegible]　　為家卿

[illegible]尾[illegible]の神のうさるてはすゑもつゝふ秋の白[illegible]

貞応三年百首[illegible]　　同

[illegible]おもけいかりとれたるわさちのゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

建暦三年内裏百首和歌

家隆卿

人すまぬ都のみやこ草ふかみ　いとゞ荻の葉ぞ乱れぬる

正三位重子経歌

続後拾遺上

こゝやとの野の草葉をわけて行　みつのたもとの露のまぎれに

民部卿為兼

秋の来ぬ野の草葉のつゆ分て　行てかゝる秋の夕ぐれ

建仁元年老若和歌合　雅経

河霧はいろ々有の色ぞ秋　そてにかせもさまぬ山もとの

左右歌合　定家卿

同百首歌合

千五百番歌合

大納言通具

荻の葉にそよ吹ぬ秋の夕ぐれ　そてにつゆ白玉

同歌合

あひ思ひ人まつ宿の草ぬれ　こゝろとほ山もとの

文永七年九月十三夜中務卿親王家十首歌

奥信濃

ひさすらふ秋の夕をかこ草　ゆめぬるまたれぬ

家集恋

歌合　和泉式部

ぬれつゝ玉ぬく袖に月ぬれ　露やこゝろ乱るらん

[illegible]

萩の上の露 雲葉

[illegible]

升拾遺 秋上 惟貞 撰

恒久親王歌合

女房

かりの鳴くうのはなすの花 恒三位 範

建保三年九月百首

ひさしのやまの紅葉のうつれるは 河内 [illegible]

建久三年九月歌百首 中将

おとさして [illegible]

建長八年百首

人とのこひのなまとすくふのこひの [illegible] 恒九条内大臣

歌集

小篠原すすきの [illegible] 恒

千五百番歌合

[illegible] 藤原のあさ [illegible] 恒

永久四年百首 小篠 二条太皇太后宮 常陸

[illegible]

[illegible] 恒 摂政

[illegible]

勅撰百首六人歌合

宮内卿

いくせん浦山の月はたゝくとなれはひとゝ家の袖

建保三年十月五首合 同

袖あらしたのゝ玉ちらすなりさたかれてもとまらぬ家

久永八年百首中 内大臣

たゝ家の玉ぬきおびたるかさうはゝ岩とゝゆる庭の面

秋部中

玉敷上

いつくとりもくもたゝぬ白雲のうへはいまのうへ人

建保三年月裏合 光明峯寺摂政

月出るたをやま山松の木ぬけもるゝ家の波

摂川院山村百首 仲実卿

みるゝ色はゝゝちふるゝ秋萩をたゝれとさせる家のたゝ

拾中納言俊忠卿家歌合百首

俊頼朝臣

秋萩も家のたゝゝゝけつまいくたゝれよるゝ深くたゝん

永久四年百首 松出を 同

みされはかりたゝりもの物をたゝ松出明るゝ家たゝ

文治二年百首 宮内卿

たゝ家あるゝぬ年ふるもたゝまて久家たゝ家の

秋四首中

花山院内大臣

萩のはなさかりなれども
あだ家にさこそ
大江千里
あきかぜに
たなびく霧のさむしろ
ひとりぬる
なくしかの
秋夕　三行合ハル
西行法師
はらはらと
散るもの
かなしき
ものは
秋の夕
くれ
通數
藤原定家
つゆ
いまそ
ゆふべ
なに
秋の夕
いかなる
同
鳴
たに
おも
ひとつ
ころ
秋の夕
くれ
同
たこころ
秋の夕
くれ

614

鹿
ひと
秋の夕
くれ
後鳥羽院
ながめ
秋の夕
くれ
たしかに
ここ
秋の夕
くれ
ころ
秋夕
西行法師
あき
つゆ
おち
ろ
あき
つゆ
おも
ろ
秋の夕
くれ
攝政
藤原俊成
たぎ
おも
ひ入て
そら
同
同
同
秋の夕
くれ

615

衣笠内大臣

新六二

秋されば野にはなさかりなみだかな

建保二年内裏秋十首会秋雜

花宮内

知家朝臣

新続古秋上

百首歌

秋の夕霧立ちのぼる山のうへにそこはかとなく月の出でぬる

永仁二年東宮会

為相卿

くれなゐの葉ぬる色の日新神にあてたる衣なりけり

秋歌中

あられふるもとのこころのさびしさは秋の夕の雲の色

藤原秋守中

雲の上人

吹きしをれあらしをひとつ色にして山のふもとの秋の夕暮れ

秋歌

三行分ト

建保二年秋十首会歌

宣家卿

巻くらのあられすさのをは秋の夕暮れ

久集

為相卿

[illegible]

第九(二字)四(重)百首曉 [illegible]

[illegible]

曉

新後拾秋下　　家隆卿

[illegible]

永久四年百首　　仲實卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

617

初一字並京百首　同

とのゐのうちいとうしく秋のあかつきまてんとをしへすんもうら

建保三年名所百首　同

こゝろをかくしひさしゆく猶もかすみすしあきさはのあさ霧くれ

右衛門督

知家卿

新六四

清涼殿の秋の月　眺

ゆかしてこゝろねしやとくるかけのこゝろ　日影

秋河霧

第四句雅経

おもひねりさいりのこゝろ　しは

ちかまてはいとこそ　やまさと

旅千五百番歌合

ふるもなくて年をふる　攝政

関白後

秋のあさのをのゝうつりや　はい

建保四年百首歌合　光明峯寺入道摂政

秋門のありてやうさ　謀叛

陸奥門親王家歌合　宮内卿

禖

なをうて作る人をさ　たれ

秋のふるさあるれ　おも

雅経

けうとする宮ふもあてたうくハ神のうちやれとう

秋ふれ

新勅撰　秋上

いろふかて物思ふ人のすゝきハ秋ちはの里とうの

桐壺

雅実親王家歌合　千里

秋ふれい浦ひ　里

秋ハ分くうとうり決

元月

人ひとの心をなぐさめんとて歌の会をもよほしけるに

遇恋

ひとりしも枕をはなれぬる夜の夢のかよひぢ

陽成院御歌合　忠岑

おく露のたまぬきかけるあさがほの花のかりねにあけぬるかな

三百六十首

坂上

まつ人をいとはぬ秋の山人をおのがありとはたれかしらまし

非心秋不到

秋思有心人人心　千里

秋の来ることあてなる人はいとはるるものとしらずや

老　同

世の秋の悲しきことをなげくかな老ぬるかぎりなりけり

貞観元年百首　為忠

ひとりのみ物思ふ山のすがの根のくるしきものは秋の夜の月

久安百首

澄憲

ものをこそ思へとつれなかりしかど秋の門やはるかぬ

久永元年百首　秋十

為家

かせ

時雨ふるこころ和らかなる秋をやとるらん

弘

弘安元年内裏百首　九五首

619

陸奥信濃歌

[illegible]

西三位重[illegible]

[illegible]

[illegible]